

のことを考え学びました。ここで得たものをもって、地域の他の活動にどう参加

していくかが会員の課題です」と会長の本木和子さんは話している。

ひまわり幼児教室

田中佳世子

「自分たちで幼児教育をやってみよう」、そんな声でたのは一昨年の春頃

ました。

でした。幼稚園入園児をもった親たちにとって、十万円をこえる、入園金や制服代は頭のいたい問題です。なぜ幼稚園に入れるの……といわれても、就学前は幼稚園か保育園へ入れるのが、当然だと思

っていた私たちでした。でも、「なぜ」といわれると、「みんながいくから」、「集団生活に慣れさせるために」、「もだちがいなくてかわいそうだから」など、幼稚園に入れなければならない確固たる理由がないのです。そんなに高い保育料を払って幼稚園に入れる意味があるのだろうか。何人かの母親が同じ疑問をもって話し合ってみました。

集団になれさせるんだったら、友だちをつくるんだったら、私たちが子どもを集めてやってみよう、ということになったのです。そして、同じような考えの人達に呼びかけてみました。何度も何度も話し合いました。そして、十五名の子どもたちを集めて、十月から週一回の保育が始まったのです。保育は保母一人に子

どものお母さんが二人ずつ交替であたり

ました。

幼稚園では預けっぱなしで子どものお母さんがわからないけど、保育することでも母親自身がとても勉強になります。集団保育になれさせるとはどういうことなのか。友だちをつくるのが子どもにとってもどんな成長があるのか、自分の目でしっかりととらえることができません。が、面白いいろいろな問題もありました。週一回の保育から三回と回数も増え、幼児の数も十二月には二十数名にもなりました。

園地の集会所を使って始めたのですが、それと同時に専用の場所探しをしたのです。同じように幼児教室を開いているドリムハイツの「すぎの子会」を訪ねていろいろ話をきいたり、公団や団地の周辺の地主に土地を貸してくれるようお願いにいったり、区や市に相談したりしました。しかしなかなか思うようにはいきませんでした。昨年の四月までには専用の場所を確保したいと思っていましたが、結局、園地の集会所二回、町内会館二回、外での保育一回ということで四月をむかえました。

幼児の数は三十八名、三歳児が半数以上

でした。そこで四歳児とひきつづき就学時まで幼児教室に残る三歳児を一クラス、幼稚園にいく三歳児を一クラスと二クラスに分けて保育することにし、前のクラスを週五日、後のクラスを週三日の保育にしました。

園地の集会所での保育は、保育環境としてはよいとはいえません。まず机やイスが子ども用じゃないので、ぶらんぶらんする足に気をとられて落ち着かないとか、手洗いが高すぎる、下駄箱に名まえをはれない、遊び場がない、部屋がせまいなどたくさんあります。

しかし一年半子どもたちと接して感じることは、子どもたちは幼稚園にいかなくても、自主的な保育のなかでも集団性を養うことができるし、友だちをつくることができる、そして社会とのかかわりあいもわかってくる、基本的習慣の自立も子どもたち同志のかかわりあいのなかで、できてくるということです。

並ぶことも、一人でおしっこすることできないなかった子どもたちが、ちゃんとできるようになる、散歩に行くときもすぐバラバラになってしまった子どもたちが、今ではきちんと手をつないで通ルールを守って歩くことができる。決して幼稚園よりすぐれているとはいえないけれど、みんなの親達の協力のなかで子どもはすくすくとのびているのです。

しかし、幼児教室を幼稚園の、幼稚園を小学校に入れるための準備教育だと考えている人たちも大ぜいいます。しかし、「三つ児の魂百まで」といわれるように、この幼児期は人間の性格形成に大きな役割をはたす時期であるといわれています。親も保育者も形だけの幼児教育ではなく、子どもたちのために本当の教育とは何なのか考えるべきだと思えます。

その点で、私たちは自主的にやっているだけに、母親との学習の場をたくさんつくって、おたがいに納得した方向で保育していきたいと考えています。今まで土地探しなどに追われて、保育内容を充実させる方向でなかったことを反省しています。

今後の問題点としては、保育内容を充実させるとともに、この幼児教室の活動が自分達だけの自己満足で終わらないように「幼児教育のあり方」の問題として、一人でも多くの人に訴えたいと考えています。横浜市には公立の幼稚園がなく、私立幼稚園のたかい保育料に頭を痛めている親がたくさんいます。助成金をたくさん出してもらうような運動とか、公立幼稚園設置の運動なども進め、親の経済的な負担を少なくするようにしていきたいと考えています。大人の遊び場はたくさんあります。広

いゴルフ場、ボーリング場、パチンコ屋、その他たくさん。でも子どもたちがのびのびとあそんだり、保育される場所は少ないのです。広い幼稚園、保育園がたく

さんできたら、経費も安く、そして、子どもも本当に幸せです。子どもを大切に政治をしてほしい、本当にそう思います。

ミニコミ

編集部

『雨堤だより』という手書き、ガリ版刷の「新聞」がある。緑区若草台の雨堤自治会報で、主婦の桂三津子さんが一人で取材し、ガリを切っている。初めは手書きの回覧版だったのが、自治会発足と共に月刊のガリ版刷りになった。形も小さく発行部数も少ない、マスコミならぬミニコミである。

教育文化センター地階の広報センターには、このようなミニコミ紙・誌が壁一面に展示されている。ここへ発行のたびに送られてくるミニコミは約三百。全市で発行されているミニコミ総数からすればほんの一部だろうが、多種多様なミニコミをみる事ができる。いちばん多いのが自治会・町内会の会報だ。一人、二人の人が出している個人紙もある。数は少ないが最近増えてきているのが、各地の消費生活コンビオンの人たちが作っている消費生活関係のミニコミである。

ガラ紙に手書きの騰写印刷のもの、タイプオフセット印刷のもの、新聞活字を

使い本格的な新聞の体裁を整えたものなど、その形も多様だが、タイプオフセットのものが比較的多いようだ。発行間隔も、不定期、数カ月に一回、月刊などいろいろだが、月刊がかなりある。発行部数は数百から多くても二千ていどまで。

横浜市内全体ではどれくらいミニコミが出されているかは、正確にはまだ把握されていないが、数千にのぼると推察される。一般の新聞、雑誌などの「マスコミ」には出ない、身近な、細かいお知らせ、話題や生活の場の語りかけ、主張などが、これらの「ミニコミ」にはあふれている。

地域の中心となっている自治会、町内会の会報についてみてみよう。

郊外のある住宅団地自治会の会報は、タイプ印刷のガラ紙を綴じた回覧であった。回覧が終るまでに日数がかかる、すぐ回さなければならぬから忙しいときなどといねいに読めない、手もとに置けないから内容を忘れやすい、昼間い

亭主族は見る機会が少ないなど、問題が多かった。そこである年から思いきってオフセット刷の新聞の形の会報を全世帯に配ることになった。それまでの月二回刊が月刊にはなったが、スペースも増え、役員会の決定、各専門部や各棟の活動、サークルの話題などが詳しく伝えられるようになった。全体の動きがひとめでわかると好評であった。団地の暮しをめぐる発言、自治会活動への意見なども紙上で活発に交された。その一年でサークルが新たに六つ生まれ、翌年の自治会総会出席者は前年よりも三割増えたという。

全市で二千以上ある自治会・町内会のほとんどが、会員に会の活動を伝える手段として、何らかの形で会報を出していると思われる。ガラ紙にガリ版刷のもの、それも回覧形式のものが少なくない。

だがタイプオフセットや活版の会報を出しているところも、郊外の新しい団地自治会などにかなりみられる。自治会・町内会の活動はともすれば役員だけのものになりがちだが、どんな形であれ会報が存在することによって、会の活動が会員に広く知らされる役割は大きい。また執行部の動きからサークルの話題に至るまで、きめ細かく「伝える」ことがきっかけとなって、一般の住民の参加意欲を起こさせ、新たな活動を生み出すことにもなっている点も見逃せない。

いずれの場合も、編集の実務を担当する人を得にくいという悩みを共通してかえている。会報づくりはめんどうな仕事だという感じがあることと、何か特殊な「技術」がいりそうだと考えられていることが、その原因のようだ。

広報センターに並んでいるミニコミの中で、技術的にしっかりして読みやすい感じのものについて調べてみると、新聞・雑誌の編集に関係のある人がかわっている場合が少なくない。そしていちど「技術」が持ち込まれると、人は代っても受け継がれている。きっかけが必要なのだ。

「ミニコミの技術」といってもたいして難しいものではないのですが、そのごく簡単なコツを知っていると知らないのでは、出来上ったものの読みやすさがうんとちがってくるのですよ」と、あるミニコミ編集者は話している。「なかでも大事なのが見出しのつけ方です。ガリ刷りの簡単なものでも、具体的に内容がわかる見出しをつけることが、読みやすさのポイントですよ」。

ミニコミに何を盛り込み、何を主張するかは市民が考えることであり、それが親しみやすい、読みやすいものになるような編集技術を市民が修得できるように援助することが、行政に求められているようだ。